

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた戦国武将

# 一豊と掛川

その3



五藤吉兵衛（後の為重）の家に伝わる  
「遠州掛川之城図」（現在は安芸市立歴史民俗資料館所蔵）

五藤家は、山内一豊の家臣として、掛川では560石を給され、土佐では1,000石を知行し、別に4,500石を代官として預った重臣

城内以外は略図になっているようです。  
( )は現在の所在地名です。

## 総構（総堀り）城下町の建設

総構（総堀り）とは、城と町全体を土塁や堀で包み込んだ囲郭のことです。後北条氏の小田原城が20万人の秀吉軍に対し、わずかな兵で敵の攻撃を3か月も支えるという、軍需的価値が実証されたことにより、その後の城下町造りに大きな影響を与えました。

一豊も、掛川の城下町を総構で縄張り・普請を行い、逆川・神代地川・新知川を内堀として用い、そろばん堀・はず堀の普請を行い、町の南北に外堀を浚渫し内側に土塁を築きます。町の東西には、木戸口・番所を置き、城内への出入りを厳しく取り締まりました。逆川の北側を侍町とし、城を中心として東西に屋敷を割り付け、家格・職掌に応じて同格・同組の者を集め、城の近くに格の高い者、遠くに低い者を配置しました。掛川西高のテニスコート西側の低い土手に松が数本ありますが、侍町の周辺に設けられた土塁のなごりです。

## 城下町の住民も移動

一豊は、城のまわりにあった寺社を城の内外に移設しました。「掛川誌稿」には、城北の土田窪にあった徳雲寺が西町に、城内にあった蓮福寺が肴町に、城中にあった神明宮が仁藤村へ、八幡宮が下股村（現在の下俣）に移設したと記録されています。また、仁藤村にいた修験者を印内村（現在の西山口地区印内）へ、郭内にいた大鋸職の者を大鋸町（現在の葛川）へ移動させています。



掛川西高テニスコート西側の土塁跡

この総構の普請により、城下町掛川の町並みが整備されることになり、掛川13町という、後の近世城下町としての掛川の骨幹部分が出来上がります。

（監修：掛川市郷土研究会連絡協議会）

「掛川城の絵図展」を報徳図書館にて開催しています。（4月27日まで）